

特別インタビュー マーク・レイバート博士

偉大なる脚型ロボット研究者から未来の研究者へ

脚型ロボットの研究で有名なマサチューセッツ工科大学（MIT）のLegラボ。その創設者であるマーク・レイバート博士がROBODEX2002での講演をするために3月下旬来日しました。レイバート博士は、跳躍する1本脚、2本脚、4本脚のロボットを開発したことで非常に有名で、大学などでのロボット工学の授業では必ず語られる偉大なロボット研究者です。今回は、レイバート博士に特別にお願いしましてロボマガ読者向けにインタビューすることができました。（編集部）



ROBODEX2002でのレイバート博士

マーク・レイバート博士の略歴

1973年ノースイースト大学を卒業。1978年、マサチューセッツ工科大学（MIT）で博士号を取得。カリフォルニア工科大学、ジェット推進研究所の技術スタッフを経て、1982年からカーネギーメロン大学（CMU）で準教授。96年、MITでLegラボを創設、同研究室教授として脚型ロボット研究をテーマにした動的運動制御に関する研究を行う。1992年、同研究室での物理シミュレーション技術を応用するためのベンチャー企業、ポストダイナミクス社（<http://www.bdi.com/>）を設立。現在は同社社長。

マーク・レイバート博士のインタビュー

地下室が秘密基地だった少年時代

編集部（以下 編）：早速ですが、レイバート博士の子供のころの話をもっともいいですか？ 小学生くらいの子供のころはどういうものに興味があったのでしょうか？

マーク・レイバート博士（以下 マーク）：子供のころ...そうですね。そう、いつも何か物を作っていました。父親が店をやっているのですが、私も地下室に自分の場所をもらっていて、そこでいろいろな物を作りました。電子工作は高校になってからですね。子供時分にはそのようなものがほとんどなかったんですね（笑）

編：当然、当時はロボットのようなものはありませんでしたよね？

マーク：（笑）ロボットなんてものは当時はどこにもありませんでしたが、でも何となくロボットのような物が人間の友達みたいな存在になるイメージはありました。子供時分は、とかく機械に興味があって、いろいろな物を作りました。ビー玉のコースターとか、メガネのワイパーとか、ドアを開けると自動的に水が流れるトイレとか。

1：後にレイバート博士が様々な脚型ロボットを開発

することになるMITのLegラボの実験室も、AIラボという建物の地下にあります。

ロボットとの出会い

編：大学の学部生のときはどのような研究をしていたのですか？

マーク：大学の学部生のときの専攻は電子工学でした。コンピュータサイエンスではありませんでした。コンピュータの授業はありましたが、コンピュータサイエンスという学科はまだなかったですね。フォートラン言語などの授業を受けました。当時のプログラミングはテープに穴をあけていく方法（2）でした。なかなか面白かったですよ。大学院の時には、IBMでプログラミングの仕事をしたり、心理学学科の研究で使用する実験装置を作ったりする仕事をしていました。

2：フロッピーディスクや磁気テープなどが登場する以前、コンピュータのプログラムは紙のテープにパンチ穴をあける方法が主流でした。

編：ロボットの研究を始めるきっかけは何だったのでしょうか？

マーク：MITの大学院での専攻は脳科学でした。しばらくして、たまたまAIラボ（3）に行ったらときにロボットを見てこっちの方が面白そうだと思ってロボットに乗り換えました。1974年のことです。

3：1959年からあるMITでも最も有名な研究所。数多くの研究プロジェクトを実行しており研究所の中に

多くの研究室を持っています。レイバート博士の設立したLegラボもAIラボの1研究室です。

編：ということは、もしその時にAIラボに行かなかったら今の博士はなかったかもしれないのですか？

マーク：（笑）もしかしたらね。MITの大学院に行ったのは、脳科学に興味があったからですし...

知的好奇心が原動力

編：研究をする上で大切にしている研究哲学のようなものはありますか？ 物事をより簡単に表現する事を得意にしているという話を聞いたことがあるのですが？

マーク：特にポリシーというモノはないですが...より物事を理解したいということでしょうか？ まだまだ私の知らないことはたくさんあるわけですからね。物事を簡単にすることは複雑にすることよりも難しいと思います。とかく技術者というのは物事をより難しくしたがるものですけどね。

編：博士にとって物作りは楽しいことですか？

マーク：もちろん！ とっても好きです。いつもは早起きはしないんですけど、物を作るときは早起きして出かけます。そして、機械油の臭いをプンプンさせて帰ると、妻は「ああ楽しい思いをして来たんだなあ」と思うわけです（笑）